

# アフアナシエフ氏のペティ研究

松川七郎

アフアナシエフ氏(B. C. Афанасьев)の著作『古典ブルジョア経済学の誕生 (ウィリアム・ペティ)』(Возникновение классической буржуазной политической экономии. (Вильям Петти) Москва, 1960)は、最近における注目すべきペティ研究の成果の1つである<sup>1)</sup>。著者アフアナシエフ氏(以下「ア氏」と略記)は、ソ連邦共産党中央委員会に付置されている「社会科学アカデミー」の経済学講座で現に活動している研究者なのであるが、最近筆者は、友人や同僚の助力のおかげでこの書物を読むことができたので、ここにア氏の研究成果を主要論点に即しつつかいつまんで紹介し、それについての若干の私見をつけたしておきたいと思う。

## I

ア氏の研究成果は、「序論」と、9章からなる本論と、「結論」とによって構成されており、本論は、ペティの生涯と、社会経済思想と、経済学ならびにその諸理論とを主要内容とし、「序論」をはじめとする全編は、小型版わずか102ページの小冊子に、ひじょうに圧縮された形で収められている。以下、章を追って紹介しよう。

ア氏は、このペティ研究における課題をそれとして述べてはいない。けれども、それが i) マルクス主義の源泉の1つをなすイギリス古典経済学の創始者としてのペティの経済学の生成過程およびその本質的諸特徴の再吟味と、ii) とりわけ第2次世界大戦後の現代におけるブルジョア経済学者や学説史家によるペティならびに古典派経済学の評価・摂取方法の批判と、iii) 経済学史におけるペティの地位の再確認とであることは、「序論」をはじめとする全内容をつうじて明らかである。

この課題に接近するばあい、ア氏はまず「ペティの生涯と活動期」(第1章)からはじめる。17世紀イギリスにおける資本主義の発展の諸特徴については、すでに「序論」で要約的に述べられているのであるが、この章では、

それを背景としながら、イギリス革命と密接にむすびついて展開されたペティの生涯が主として共和国時代までについてごく簡単にあとづけられる。そしてア氏は、この革命によって提起された諸問題を解明するために展開されたペティの経済学=統計学上の創造的活動が開始された時期を、1660年の王政復古後だとし、『租税貢納論』(1662年)以下の6つの主著を、それぞれ簡潔に特徴づけながら、執筆年次順に示しているのである。

このような時期に活動したペティを、ア氏は封建主義に挑戦する進歩的階級として登場した「イギリス・ブルジョアジーのイデオログ」(第2章)として特徴づけ、その社会経済思想の内容をつぎの諸点について分析している。すなわち、i) 資本主義的私有財産の擁護、支配者の奢侈の弁護、封建的な「怠惰な地主」に対する「勤勉で活動的な人士(資本家)」の弁護、ii) 財産の不平等の「自然的」永久性の擁護、支配者と勤労者の利益の一致の説得、iii) レヴェラーズやディガーズに対する反対、iv) ブルジョアの租税原則の擁護、v) ブルジョア国家の経済政策としての資本蓄積の促進、そのための生産力の増進・教育改革・宗教的寛容の主張、vi) ブルジョアの植民政策の推進、植民地における奴隷制の是認、全世界をめざすイギリス資本主義の膨張政策の基礎づけ、がこれであって、このような進歩的性格をもつ反面、ペティは経済に対する国家の強力な干渉をみとめていた。この点にかれがこうむっていた歴史的制約がある。そしてア氏によれば、ペティのブルジョア的性格はその租税原則にもっともよく代表されているが、現代のブルジョア経済学者、たとえばアメリカの学説史家 J. F. Bell は、ペティの租税原則のなかから自分たちにつごうのいい点だけをとりだして自説を擁護している。

ペティにおける「経済学の対象と方法」(第3章)の問題は、同時にその経済学の生成の問題でもある。ア氏は、この問題についてのペティの大きな功績を、かれが経済現象の研究のための特別な学問の樹立を必要と考え、その基礎をすえたこと、すなわち、「経済学が独立して分離した最初の形態」(マルクス)としての政治算術をうちたてたことにある、とする。このブルジョア科学は、自然科学者(医者)としてのペティが、ベイコンやホップズ

1) 最近における注目すべきペティ研究のもう1つの成果は、渡辺輝雄氏の『創設者の経済学』(1961年4月)の第1篇「経済学の誕生——ウィリアム・ペティの研究——」である。これらの両研究は、その表題ばかりではなく、研究課題においても内容においても、共通する点が多くない。

や王立協会などの影響をうけながら、自然体の研究方法を政治体の研究に適用する過程に生みだされたものであって、唯物論(経験論)・科学的抽象・数量観察をその方法的基礎とし、「人民・土地・資財・産業等々」、すなわち資本主義社会の構造を研究対象とするものであった。この科学は、自然法則と経済法則とを同一視する点にとりわけ明瞭にあらわれているように、経済学としては素朴であり、欠陥の多いものではあったが、実はこの同一視こそ、客観的な経済法則の存在をはじめて明らかにしたものであり、また労働価値論の創造に寄与したものである。ところが、ブルジョア経済学者や学説史家は、i) 政治算術の数学的方法にのみ着眼し、ii) 経済学の使命を現象の量的諸関係の研究に限定し、本質的諸関係の研究を放棄し、iii) 経済法則の客観性を事実上否定し、資本主義社会を個人経済の視点から外面的にとらえ、経済法則をたかだか主観的心理的なものとしてしか追究していない、iv) その結果、経済学はビジネスマンの「科学」になりさがっている、とア氏は批判している。ここでひきあいだされているのは、上記の Bell のほか、G. L. Bach, K. E. Boulding, A. Hansen, J. M. Keynes, L. C. Robbins, A. H. Smith などである。

## II

第4章から第9章までは、このような科学的方法を用いて資本主義社会を研究する過程に創造されたベティの経済学上の諸理論のもろもろの特徴が述べられている。そして、第4章は「労働価値論の諸特徴」である。ア氏は、まずはじめにベティの価値論そのものを分析し、実質的には商品価値にほかならぬ「自然価格」や、「人為価格」・「政治価格」・「真の政治価格」の内容を解明する。つぎに、ベティが、事実上、労働の二重性の理解の端緒をつかんでいたことを明らかにし、ベティは価値の源泉を「労働と土地」だとしているばかりもあるが、実質的には、その唯一の源泉を労働に帰していたことを論証し、ベティが貨幣の本質や諸機能についてもいちおう正しい理解をもっていたことを示している。けっきょく、ア氏は、ベティの価値論には、当時の俗流経済学=重商主義の影響をこうむった欠陥や理論上の混乱はあるにしても、価値論においてつねにかれの念頭をはなれなかったものは、「社会的生産物の生産に対する労働の全投下量」なのであって、価値を貨幣形態において論じていても、実はその基礎にこの考えがあった。以上すべての意味において、ベティは価値論の貴重な第1歩をふみだしたのである。

「国富、生産的および不生産的労働の問題」(第5章)

において、ア氏は、ベティは国富の問題を上述の労働価値論の見地からとりあつかった、としている。そしてこのばあい、ベティには、富と貨幣との同一視という謬見もあるが、かれがしだいにこれを脱却したこともまた事実であって、けっきょくかれは、国富の主要部分は物質的对象にあるとし、富の父母は土地と労働だという立場にたつて、国富の源泉を労働にみいだした。また、生産的および不生産的労働の問題については、ベティは剰余価値を生む労働のみを生産的労働だとするほど進歩していたのではもとよりないが、「農夫・海員・兵士・工匠・商人」を1国の「大黒柱」と考え、「医者・僧侶・弁護士・官吏」を不生産的だとしていることであらわれているように、漠然とではあれ、この問題、ひいては階級構成の問題に正しく接近しようとしていた。そこでア氏は、上記の Bell, Hansen, Keynes をはじめ、L. Haney, G. Schackle などのこの問題に関連する所説を検討し、かれらがベティの見解をいわゆる「生産要素説」や、需給による商品価格決定論におきかえたり、限界理論を展開して価値論を否定したりしている点を指摘している。

「賃銀論」(第6章)は、ア氏によれば「ベティの経済学説の中心の1つであり、剰余価値論の基礎をなしている。」ベティは賃銀の本質を理解しえず、これを「労働の価格」と考えた。この見解は、その後古典学派の伝統的な考えかたになったが、その反面、ベティの賃銀規制論——労働者の最低生活費への賃銀の法的規制——は、賃銀法則=労働力の価値法則の認識への手さぐりの接近を示す。そして、労働者を、「労働」を売り、賃銀を受けとる人間の特殊のカテゴリーとしてはじめて規定したところにベティの功績があるが、上記の Bell や、É. James, L. A. Hahn などは、ベティの賃銀規制論を、現代資本主義社会における労働者の賃銀切り下げや、搾取関係の隠蔽に利用している、とア氏は批判している。

ところで、ベティの「賃料論」(第7章)は、ア氏によれば「労働価値論とこれを基礎とする賃銀論の見地から」研究されているのであるが、かれにとっての賃料(地代)は剰余価値の一般的形態であり、このばあいかれの出発点は、商品価値は労働によって生みだされ、しかも労働者は生産された価値の全部を受けとらぬ、という点である。このように、かれは剰余価値の真の源泉の認識に接近し、搾取関係のある程度明らかにした。そして、賃料の大きさに影響する諸要素の1つを賃銀だとし、この点から、かれは住民を1種の資本と考え、「人間の価値」を計算した。ベティはカテゴリーとしての利潤を知らず、利子を地代から派生する第2の剰余価値と考え



たのであるが、その反面、土地の豊度・位置および土地への労働投下の3者によって解明されるかれの差額地代論は、スミスよりもすぐれたものであった。以上の問題に関するブルジョア学者の見解に対するア氏の批判は、いわゆる「生産要素説」に集中しており、上記の Bell, Haney, Schackle, Smith のほか、J. Strachy の所説がその対象にされている。

社会的総「資本とその循環」(第8章)の問題の研究に1歩をすすめた最初の経済学者はペティであり、「地価論」(第9章)において、地代を一般的利子率で資本還元して地価を算出するという現在では常識になっている方式に先鞭をつけたのもペティである。しかし、前者の問題について、かれはそれを正しく提起しながら再生産論の1歩手前でとどまり、また後者の問題について、かれは利子を地代から派生させた当然の帰結として、地価の決定に人間の年齢という誤った要素を導入した。それにもかかわらず、かれは、結果においては一般的利子率を考慮しているのと同じ結果をえたのである。

ア氏は、「結論」を、経済学史におけるペティの地位という点にしばっている。このばあい、まず上記の Bell, Haney のほか、J. Schumpeter, H. W. Spiegel などの所説をあげながら、ブルジョア経済学者や学説史家は、i) 経済学におけるペティの本質的見解や、科学的経済学の建設において果たしたかれの役割を無視するか、ii) ペティを統計学または統計的方法の創始者として歪曲するか、iii) かりにペティを経済学の創始者として位置づけるにしても、ジェヴォンズやフォン・テューネンやマーシャル流の「古典」経済学のそれとするか、のいずれかしているにすぎず、かれらの経済学は300年もまえのペティのそれにおよばない。そしてア氏は、上述の各章で吟味したペティの経済学の本質的諸特徴を要約的に列挙し、科学的経済学の第1歩をふみだした者に特有の素朴さ・誤謬・限界はペティの経済学史上の地位を左右するものではないとし、古典ブルジョア経済学の創始者としてのかれの地位を再確認しているのである。

### III

ひじょうに圧縮された形でまとめられているア氏の研究をさらに圧縮したために、紹介し落した論点もすくなくはないが、筆者が理解したかぎりでのア氏のペティ研究の内容は、概様以上のとおりである。筆者は、この研究がア氏自身によって設定された上述の課題に答え、すくなくともその大すじにおいてそれを解明していることを疑わない。そして、ペティの経済学を、その社会的背景ばかりではなく、社会経済思想との関連において総合的

に考察しようとしているこの研究は、第2次世界大戦後における学説史研究において、啓蒙的な意義を主張するものであると考える。と同時に、筆者が、この研究について、細部の問題はともかく、全体として望蜀の念を禁じえなかったことも事実である。そしてこれを一言でいえば、すでに述べたように、ア氏の研究は、ペティの経済学の生成過程とその本質的諸特徴との再吟味を主要課題としているが、実際には、この後者、すなわち、いわばできあがってしまった形におけるペティの経済学の理論的解明により多くの重点がおかれ、その生成過程の問題にあまり重点がおかれていない、という点である。いいかえれば、この研究は、表題にも明示されているように、ペティにおける古典経済学の「誕生」に関するものであり、したがってこのテーマは、先行者のないそのきわにおける創始者ペティによる科学的経済学の創造過程についてのたちいった究明の問題を、おのずから提起せずにはおかないはずである。ところが、ア氏のばあいには、この問題よりも、むしろいちおう完成された形におけるペティの経済学がマルクスの理論に依拠しつつ再構成され、その立場から分析される結果、「誕生」の過程ばかりではなく、できあがった形においてさえも、必ずしも十分にその含蓄がとらえられていない、といううらみをのこすことになるのである。

ア氏がペティにおける経済学の生成の問題をそれとしてとりあつかっているのは、主として第3章である。このばあい、ア氏がペティに対するペイコンやホップズや王立協会やの影響をあげているのは、たしかにそのとおりであるし、このことはブルジョアジーのイデオログとしてのペティの成長についてもいいうるであろう。また、ペティの経済学の対象が自然体との類比における政治体(資本主義社会)であり、とりわけその構造であること、さらに、その主たる研究方法が唯物論(経験論)と科学的抽象と数量観察とであったことも疑いない。ところが、ア氏は、ペティはこれらの方法を資本主義社会の研究に適用することによって経済学の諸法則を発見し、諸理論を創造したというだけで、どのように適用したかとか、これらの方法の相互関連とかについては、それ以上具体的につきとめようとはしていない。もっとも、ア氏は、この第3章で、ペティのばあいには「統計的方法が抽象化の方法と結合している」といっている。しかしながら、この問題についてのア氏の論究は、この点にとどまってしまう、ペティは「ある意味では統計学の発明家であった」(マルクス)という評価におわってしまうのである。

統計的方法と抽象化の方法との結合を指摘することによって、ア氏はペティにおける経済学=政治算術の生成の1つの核心に迫ったといわなければならない。というのは、現在、総じてペティの統計的方法と呼ばれているもののなかには、社会経済現象の数量的観察とそれにもとづく推理がふくまれているが、数にもとづくこの推理こそ、実はかれの科学的抽象のためのもっとも重要な手段なのであって、かれの経済学上の諸理論もまた、これによって創造され、構成されたのである。このことは、ペティが駆使している数字そのものを内在的に吟味すればいっそう明瞭になるであろう。いいかえれば、ペティの経済学=政治算術のばあいには、統計的方法と科学的抽象とが分化した形で用いられていたのではなく、両者は1体としてその方法を形成していたのである。ところが、ア氏の論究は、上記の点にとどまってしまう結果、この未分化の状態が、截然と分化した観点から切り離れてしまい、ペティの時代にもうすでに経済学と統計学とがはっきり分化していたかのような印象をあたえる、ということになるのである。なお、この問題に関連して、ア氏はペティと不可分の関係にあるグラントをまったく問題にしていない。それがどういう根拠にもとづくものなのか、筆者には理解できないけれども、政治算術の生成過程の究明にあまり重点がおかれていないこととおそらく無関係ではなからう。

以上と同じことは、第4章以下の理論的な部分についてもいえよう。ア氏がペティの全経済理論を、その大すじにおいて、価値論(自然価格論)—剰余価値論(賃料論)という観点にたって再構成しているということは、上述した筆者の紹介からも明らかであろう。そしてこのような観点が理論的研究において正しいということは疑いない。しかしながら、ペティの現実の理論的成長や深化の過程は、これとは逆に、剰余価値論—価値論であった。いいかえれば、現実の過程においては、ペティは労働価値論の見地から国富や賃銀や賃料を研究したのではない。むしろその反対に、現実政治の要請に答え、当時の社会における最大の富を構成していた賃料の本性を解明するために、数量的観察を媒介とする科学的抽象をおこなった結果、剰余価値論を創造し、さらにこれを掘りさげて価値論にゆきついたのである。ところが、ア氏のようなしかたでペティの全理論を再構成してしまうと、ペティにおける理論の形成に果たした数量的方法の具体的役割が不十分にしか解明できないばかりではなく、ペティの経済学=政治算術における理論的分析と統計的方法との関連を、適切に位置づけることも困難になるであろう。ペ

ティが、幼年期の資本主義社会における拡張再生産を可能ならしめるために蓄積されるべき剰余を実質的には意味するところの、「剰余利得」という概念を構成しえたのも、数量的観察の結果である。ア氏は、第8章で、ペティは再生産論の1歩手前でとどまったといっているが、この「剰余利得」という概念を考えれば、ペティはこの問題についても第1歩をふみだしたというべきであろう。

さらに、ペティの経済学の生成過程のよりいっそう具体的な解明は、ア氏のブルジョア経済学者や学説史家に対する批判にとっても重要な意味をもつはずである。というのは、ペティの経済学=政治算術をその生成過程において考察すれば、すでに述べたかぎりにおいてもうかがわれるであろうように、経済学的側面と統計学的側面とが1体をなし、両側面がともにその本質的特徴を形づくっていたことがいっそう明瞭になるからである。したがって、ペティを統計学や統計的方法の創始者として評価し、位置づけることそれ自体が本来無理であり、ばあいによっては恣意的でさえあるということは、おのずから明らかになるのである。資本主義社会の全体認識の理論をふまえない統計的観察がとぼしい意味しかもちえないということは、あらためて指摘するまでもない問題であろう。

これを要するに、ア氏もくりかえし指摘しているとおり、経済学者としてのペティは、「手さぐりで」古典経済学の貴重な萌芽を創造した人である。かれの全生涯は、この萌芽の生成過程そのものであったといっても過言ではなく、この過程をつうじて、漠然たる観念や思想がいっそう明確な形において意識化され、社会科学的方法や経済学の諸理論として、はじめて客観化されたのである。したがって、ペティにおけるこの意識化の過程がいっそう具体的につきとめられなければ、創始期における古典経済学の本質的特徴そのものも、的確にはとらえにくくなるであろうし、かりにそれをとらええたにしても、現実社会の反映として一般的に説明するほかはない、ということになるであろう。ペティが創始した方法や理論は、疑いもなく当時の現実社会を反映している。しかし、そう説明するだけでは、なぜほかならぬペティだけがこれらを創始しえたのが解明できにくくなるであろう。17世紀が「天才の世紀」といわれていることから知られるように、ペティだけが天才であったわけではもとよりないのである<sup>2)</sup>。

2) 以上の私見に関連して、本誌の第12巻第1号(1961年1月)所収の拙稿「政治算術の再評価のために」を参照ねがえれば幸いである。